差別・ハラスメントのない大学教育・研究環境の整備に関する要請書

一橋大学学長　蓼沼宏一　殿
一橋大学教育研究開発センター　御中
一橋大学大学院言語社会研究科　御中

2017 年 1 月 31 日作成
一橋大学大学院言語社会研究科修士課程 2 年在学
梁英聖
連絡先（略）

記

時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

私は一橋大学（以下、本学）大学院言語社会研究科修士課程 2 年に在学しております、梁英聖（りゃん・よんそん）と申します。本学言語社会研究科の鵜飼哲教授（主ゼミの指導教員）と、イ・ヨンスク教授（副ゼミの指導教員）のご指導のもと、社会学研究の手法を用い、在日コリアンへのレイシズム（人種／民族差別）を研究しております。

さて、私は研究と課外活動を兼ねて、反レイシズム情報センター（ARIC）[i]という学生・院生・若手研究者の NGO を主催し、その代表を務めております。去る 2016 年 12 月 14 日（木）の午後 6 時から 8 時まで、本学言語社会学研究科の 4 階共同研究室 2 にて、ARIC が主催する学生向けの公開研究会「ARIC 緊急企画「世界で台頭するポピュリズム／排外主義と日本」」を実施しました。本研究会は、ヘイトスピーチを繰り返すことで猛批判を浴びていたドナルド・トランプ氏が米国次期大統領に当選し、世界レベルで極右台頭と差別煽動効果が懸念されていたことを受けて急遽企画されたものです。当日は本学学生を含め計 11 名が参加していました（研究会終了時）。

この会の開会直前である午後 5 時 50 分頃に、本学大学教育研究開発センターの准教授であるジョン・F・マンキューソ氏が突如会場に乱入し、イベントの妨害行為に及ぶという事件が起こりました。教室に入るなり彼は怒鳴り声で「You are racist!」「You are ridiculous!」「Fuck！」等といった聞くに堪えない暴言と差別発言を連呼しています。彼は私たちの再三の退去要請にも従おうとせず、逆に英語で丁寧に退去を要請していた A 君に対し「Don't touch me!」等と顔を真っ赤にして怒鳴り、A 君を酷く傷つけ委縮させました。私たちが何とか彼を退室させたのちも、彼は廊下で数分間に渡り私と A 君に暴言と差別発言を繰り返しました。彼は在日コリアンである私に対してその時、「Do you have a passport? Do you have an ID? Do you have a 外人 card?」等と、大声で、執拗に問いただし、公の場で私の出自を問題にし続けました。

本妨害事件に関するマンキューソ氏の問題は指摘すれば数えきれませんが、決定的な問題は、彼が自ら「I work for Donald Trump.」とトランプ氏を支持する政治活動家であることを公言した上で、「We travel around the world, and we contact people who are speaking negatively against Donald Trump.」と叫び、私たちの研究会に明確に反対しそれを政治的目的で妨害しにやってきたことを明示した点です。上の言に明らかなとおり、彼は自らの妨害行為が組織的ネットワークで、しかも世界中のトランプ支持者によるネットワークで連携をはかった政治的妨害であることを私たち学生に強く印象付けたのです。私はもちろん、その場に居合わせた学生全員が非常に強い恐怖と悲しみに襲われました。

さらに深刻なことに、妨害に及んだマンキューソ氏はその日、主催者たる私たちが何度問い質しても、名も名乗らず、連絡先も教えることなく、身分も一切明かさなかったのです。私たちはただ、正体不明の、体格の大きな白人男性が、日本語を一切使わずに、英語だけでまくし立てて ARIC の活動を妨害しに来たという事実以外の、何の情報も持たなかったため、彼の妨害行為はそれだけ一層恐怖を掻き立てるものとなりました。私たちは彼が自ら公言した通り、世界中のトランプ主義者の間で何らかの連絡を取り、世界中で（彼らの言う）「反トランプネガティブキャンペーン」を攻撃する政治活動にやってきたものと考えました。妨害者が日本語を解さず英語でしか話さなかったこともあり、本当に米国かどこか外国から送り込まれたのではないかとさえ考えたのです。妨害に来た理由も不明でした。唯一理由らしいこととして彼は、ARIC のサイトでトランプの発言を間違って引用していると言ったのですが、私たちの求めに対しても該当する個所を示すこともできず、その個所を後日でも教えてほしいとの私たちの要請もなぜか拒絶し、連絡先さえ教えなかったのです。

妨害した犯人がマンキューソ氏、つまり本学教員だと判明したのは、事件後一週間が経とうとする昨年 12 月 20 日（火）に、私と A 君が直接マンキューソ氏に会いにゆき、妨害事件の犯人が彼である事実を確認したときでした。妨害事件を知った本学教員が私たちにマンキューソ氏が登場するジャパンタイムズの記事[ii]を紹介してくれました。そこに掲載されていた彼の顔写真と妨害事件の犯人が同じであるようにみえ、私たちは愕然とし更なる憤りと悲しみに襲われました。そこで直接事実を確認および（確認を終えた上での）抗議をするために、12 月 20 日（火）にマンキューソ氏を授業終了後に訪ねたのです。彼の姿から妨害事件の犯人と同一人物であることを確認した上で、彼が妨害行為に至った経緯と、当の妨害時に彼が放った主張の根拠とを尋ねました。

マンキューソ氏は悪びれもせず当日に妨害にやってきたのは自分だと認めました。その上で、こちらの抗議には誠実に耳を傾けず、むしろ、「Fuck」や「Bullshit」、「Shut up」などの「Swear Word」等という言葉を用いて私たちを威圧し、罵倒してきたのでした。なぜ妨害したのかという私たちの問いに彼は、相変わらず ARIC のウェブサイト上に記載されたというトランプ氏の引用の「誤り」云々を持ち出しました。私たちがどこなのかを教えてほしいと言うと、このときは PC で ARIC のサイトにアクセスし、1 分ほど何やら探すふりをしていましたが、何も示すことができませんでした。むしろ「私たちがサイトを消したの

だ」なる事実無根のデマを持ち出し、その場に居合わせた学生数名の前で、私たちを誹謗中傷しさえしたのです。学生数名の前で、私たちを自制心のない極左学生だ等と誹謗中傷したことも、私たちに深い傷を与えました。私たちの妨害行為について謝罪すべきとの要請に、彼は口頭で「I am sorry」とだけ口にし「謝罪」してみせましたが、それは大変軽薄なものであり、その後手を上げておどけたジェスチャーさえ見せての「謝罪」でした。はからずも彼は妨害行為の責任を認めたことにはなりましたが、その誠意のかけらもない、人を愚弄する彼の態度に、私たちはかえって失望し、傷ついたことはいうまでもありません。

以上が事件の顛末となります。

私と私たちが受けた被害は甚大なものでした。研究会の正常な進行の妨害という観点からだけでも、以下の被害を挙げることができます。第一に開始直前にその場で待機していた参加者全員にマンキューソ氏の暴言と差別発言を目の当たりにさせることになり、反レイシズム団体としての主催者 ARIC の信用を著しく損ないました。第二に、開始直前に妨害され研究会のために学生が予習・準備を行っていたことが妨害されました。第三に、妨害のため研究会の開始時刻が 15 分以上遅れました。第四に、マンキューソ氏を会場・教室から追い出した後も、さらなる妨害行為が行われることを防ぐために、急遽主催者から追加 2 名を警備人員として割いたため、その 2 名が予定通り研究会に参加できず貴重な学習・研究機会が奪われました。

そして言うまでもありませんが、私とその場にいた学生・参加者全員が、妨害事件によって受けた著しい恐怖であり苦痛を受けています。別添資料にある通り、被害を受けた学生のなかには恐怖のあまり、学習・研究や課外活動の継続じたい躊躇する学生さえいます。その被害は当日のみならずその後も持続しています。私自身、妨害事件によって多大な恐怖と憤りにより、その後の学業や研究・課外活動に甚大な被害が生じました。とりわけ氏の妨害事件は、私の修士論文の執筆を直接に妨げました。妨害事件による恐怖は事件後も消えることなく、幾度もフラッシュバックし、その度ごとに作業が中断を余儀なくされました。12 月 20 日の抗議時にマンキューソ氏が非を認めるどころか逆に私と A 君を攻撃したことは輪をかけて私を苦しめ、それらは私を頭痛や食欲不振や不眠で悩ますことになりました。修士論文は期限内に提出したものの、マンキューソ氏による妨害事件がなければ、それ以前に集め整理を終えていた幾つかの資料を論証のため追加的に用い、より多くの推敲を重ね、論文の完成度を高めることができたことは否めません。妨害事件は私個人の研究業績にも取り返しのつかないマイナスを与えました。加害者が本学教員であったことが本学そのものへの信頼をも著しく傷つけていることも書き添えておきます。

マンキューソ氏による妨害事件による被害について述べればきりがありませんが、以上の被害から本事件が私はじめ本学学生や他大学の学生の人権を侵害した、深刻極まりない差別・ハラスメント行為であることは明白です。しかも加害者がトランプ主義者を公言し、そのために研究会と ARIC の活動を妨害しに来たことを明言している以上、許しがたい政

治的暴力であることも明らかです。本妨害行為の最大の問題は加害者が本学教員である点です。控えめにいって本学教員が本学学生の課外活動を差別と暴言と暴力を用いて妨害した時点で、教員としてはその資質を欠いているというほかありません。

本妨害事件によって、また事件の未解決によって、私は本学内で差別・ハラスメントを受ける心配なく、安心してマイノリティが学習・研究に携わることのできるという、最低限の学問の自由を保障する環境を享受することができなくなりました。

本妨害事件を許すことは、私個人の侵害された人権を回復することができなくなるだけではありません。本学は、混迷をふかめる世界のなかで、人権と多様性を尊重し、グローバルな課題を解決するための能力を身に着けた「グローバル人材」の育成を掲げているはずです。そのような意義ある本学にとって、本事件の放置は「グローバル人材」育成や研究教育に必要な環境を損なうものであるばかりか、本学のアイデンティティを否定するものであると考えます。

つきましては、私と私たちの人権救済と差別・ハラスメントの無い教育・研究環境の速やかな整備を求めるため、以下の通り要請いたします。

詳細な被害については添付資料をご参照ください。

【要請事項】

１．可及的速やかに本妨害事件に関する被害実態を調査し、差別・ハラスメント行為はじめ人権侵害行為をはたらいたジョン・F・マンキューソ准教授に対して厳正な処分を下すこと。

２．本妨害事件によって著しく損なわれた、差別・ハラスメント行為の無い大学教育研究環境を可及的速やかに整備するために、本大学内における明示的な反レイシズム規定を制定すること。

なお本要請書について詳細に説明を行うための面談を希望します。

誠に勝手ながら本要請書に関する回答期限を 2 月 10 日（金）までとさせていただきたく存じます。私梁英聖までご連絡くださるようお願いいたします。

以上

追記

またマンキューソ氏は、フェイスブックの個人ページのプロフィール画像に、旧日本軍の軍旗でありアジア侵略の象徴であった旭日旗を掲げ、また英会話テキストにおいて複数個所にわたってのセクシズムに満ちた記述をしております。これらは本件に直接関係あるものではありませんが、私は、ファシズムを煽動する効果を持つ旭日旗掲揚とセクシズム的記

述を英会話テキスト[iv]に載せて憚らない人物が、本学で教員として勤務し、学生の教育を行っていることに恐怖を感じずにいません。本学教員としてもはや適格性を欠くだけでなく、私にとってはそのような教員が勤務しているということじたいが非常に苦痛であり、直接の脅威です。ゆえに別添資料にはそれら証拠も添付しております。

---

[i] ARIC は、頻発するヘイトスピーチはじめ日本のレイシズムに対抗すために、①調査②相談③教育を通じて、EU や米国で成立している反レイシズム規範を形成を目指す、若手研究者・学生・院生による NGO です。詳しくは ARIC のサイト http://antiracism-info.com/ をご参照ください。

[ii] 当該記事は 2016 年 11 月 6 日付の SIMON SCOTT による "On the trail of team Trump in Tokyo: Reporter stalks that elusive breed of American in Japan: the Trump supporter" （http://www.japantimes.co.jp/community/2016/11/06/voices/trail-team-trump-tokyo/#.WFFrs7KLTtR）をご参照ください。

[iv] ジョン・F・マンキューソ（2009）『恋脳を鍛える英会話 You choose!』エンターブレイン。一例を挙げれば、「正直に言いましょう。男性は女性を見つめるものです。これは遺伝学的に正しいことなのです！」等と明記されています（21）。言うまでもなくこの記述はジェンダーを本質的なものとみる、しかも「遺伝学」なる「科学」を用いてこれを正当化するセクシズムです。上の一文の続きは「もし、見つめられて不愉快だったり、やめてくれと言うつもりなら、男性の立場から言わせてもらうと、それは大きな間違いです。女性は膨大な能力を賦与されていますが、多くの女性はそれに気づいておらず、彼女らはいとも簡単にその能力を無駄にしているのです。女性らしさを武器にするべきなのです」（21）。これは、女性が男性の視線を不快に思い、これを拒否することの否定になっています。のみならず「女性らしさ」を「武器にするべき」だというのです。フェミニズムの全否定といって差し支えないのではないでしょうか。